

『和仏蘭対訳語林』の振り仮名の機能

——第4冊・第19言語集を対象として——

池田 幸恵

はじめに —— 『和仏蘭対訳語林』について

長崎歴史文化博物館には、『和仏蘭対訳語林』と題された全5冊のフランス語学習書(注1)が所蔵されている。本資料は、長崎通詞本木正栄らの手により、日本において初めて翻訳されたフランス語の文献であり、同じく長崎歴史文化博物館所蔵の『弘郎察辞範』と本来一体のものであること(注2)、その原典は、Pieter Marin の『Nouvelle Methode Pour apprendre les Principes & l'Usage des Langues Françoise et Hollandoise』(以下、『Nouvelle Methode』と略称。)の1775年版及び1790年版であることなどが明らかにされている(注3)。

同書の内容は、第1冊冒頭に「Principes Absolument Necessaires./zeer hoognodige grondregels./詞源要律篇」(注4)、「des parties d'oraison./van de deelen der reeden./詞の區別を論す」とあり、静詞(名詞)、虚詞(形容詞)、動詞などの品詞説明や文法事項が記されている。第2冊冒頭には「CONJUGAISON des verbes Irreguliers de plus Nécessaires./conjugatie der Nodigste onregelmaatige werkwoorden./無格動詞應変」とあり、第1冊と同じく文法事項が続き、その後58葉以降が作文法となっており、この2冊は文法篇である。

第3冊冒頭には、「Beknopte en leerzaame Samenspraaken over aller hande stoffen./簡易にして学に益ある諸雑話の言語集」(注5)とあり、第1言語集から第10言語集までの会話集が収められている。同じく第4冊には第11言語集から第19言語集が、第5冊には第20言語集から第23言語集が収められており、第3冊から第5冊までは会話篇となっている。

本資料の訳文については、固有名詞の発音表記などからフランス語の翻訳というよりフランス語の対訳として付されているオランダ語からの翻訳であること(注6)、その訳文は『ドゥーフ・ハルマ』に見られるような口語体ではなく文語体であること、語彙に唐話語の影響が見られることなどが指摘されているが(注7)、その翻訳のあり方の詳細については明らかにされていない。

したがって、本稿においては、訳文の漢字・漢語に付された振り仮名を考察する

(2)

ことにより、本資料の翻訳の実態を明らかにしたいと考えている。

1、言語集の漢字と振り仮名

『和仏蘭対訳語林』の言語集の訳文には、多くの振り仮名が付されているものの、用言の活用形が訳文本文とは異なり、そのまま読み下せない例が数多く存する。

Celui ci est Excellent.

deze is heel lekker.

是甚^{ヨロシ} 佳好なり (第3冊・第1言語集)

Tournez la salada.

Roer de slar om.

蒿^{チサ}苣^サ菜^{カキマゼル}を攪^{カキマゼル}合^{カキマゼル}せよ (第3冊・第3言語集)

Je t'apprendrai à te lever avant moi.

ik zal ú leeren voor mij op te staan.

汝我より先きに起^{ツキム}寤^ムせんことを你に教ん (第3冊・第4言語集)

訳文本文では「佳好なり」「攪合せよ」「起寤せん」は「カコウなり」「カクゴウせよ」「キゴせん」と読むと思われるものの、その振り仮名は「ヨロシ」「カキマゼル」「ヲキル」となっており、振り仮名を用いて読み下すことはできない。これらの例は、訳文本文ではオランダ語に相当する意味を漢字・漢語で記し、それらに振り仮名で以て日常語の語形を示すことにより、訳文の意味の理解を助けている例だと考えられる。

また、ここで用いられている「攪合」「起寤」などは、『漢語大詞典』などでも中国における使用例が見られず(注8)、『唐話纂要』や『雑字類編』等の唐話辞書には見られないものの、唐話語であった可能性もある。

本資料において、唐話語で翻訳した上で(注9)、振り仮名により意味を示すということが行われたことは、以下のような例からも明らかである。

A quelle Enseigne ?

Wat hangt 'er út ?

其処には如何なる招牌^{カンパン}を掛るや (第3冊・第2言語集)

Taisez-vous, petit espiégle.

Zwijg, stoút gúitje.

黙止せよ惡^{アノモト}棍^コ子 (第3冊・第10言語集)

「招牌」「惡棍」は『雑字類編』に「招牌(右訓:カンパン)」(巻②26ウ6)、「惡棍(右訓:アフレモノ/左訓:ワルモノ)」(巻⑥3オ8)とあり、唐話語であることが分かる。

長崎通詞が『和仏蘭対訳語林』を日本語に翻訳する際に、どのように唐話語を中

心とした漢字・漢語を利用したのか、またそれらに付された振り仮名がどのような機能を果たしていたのかを明らかにするため、本稿においては一例として第4冊・第19言語集を取り上げ考察する。

2、第19言語集について

はじめに述べたように、『和仏蘭対訳語林』の第3冊から第5冊は会話篇であり、第1言語集から第23言語集まで、挨拶や旅行などのテーマごとに数十例から二百数十例の例文が収められている。中でも、第19言語集には、「Entre un jeune-homme de famille & sa maitresse./ tusschen een jong heer en zijn minnares./ 少年嬢子春情乃問答」という副題が付されており(注10)、恋愛に関する会話が全部で90例収められている。この対等な男女の自由恋愛という会話のテーマは江戸時代の日本では考えられないことであり、他の言語集に比べ振り仮名の付された漢字・漢語も多く、外来語に注記が付された例もあるなど、翻訳に工夫の跡が見える(注11)。

具体的な考察に入る前に、『和仏蘭対訳語林』の付訓のあり方について概観するため、第19言語集の収められている第4冊の付訓例の総数を下に示しておく。

言語集	テーマ	例文数	付訓箇所	右訓	左訓	両訓
11	冬の外出	82	9	8	1	
12	花壇	77	5	5		
13	倒産	49	8	5	3	
14	仲買	82	13	9	4	
15	旅行	138	90	87	3	
16	貿易	120	24	22	2	
17	言語等	135	19	12	7	
18	喫茶	154	197	182	15	
19	恋愛	90	99	89	8	2

表から明らかなように、言語集のテーマごとに、例文の数もそれらの例文に付された振り仮名の数も大きく異なっている。この第4冊の9つの言語集の場合、海外旅行についての例文を収めた第15言語集と、お茶を飲みながらの会話を収めた第18言語集にも多くの付訓例が存する。特に用例数の多い第18言語集は、話し相手である従姉妹の容姿や服装を誉めたり、お茶や茶器の詳細を述べた例文などが多く収められており、喫茶という習慣を含め、江戸時代の日本には馴染みのない例文が多い。このように、日本の習慣とは異なり、理解の難しいテーマの言語集ほど、多くの振り仮名を付すことにより文意の理解を助けているといえる。第18言語集と、本稿で取り上げる第19言語集は、当時の日本では馴染みが薄い内容で理解が難しい

(4)

という点で共通している。

第 19 言語集には全 90 例、男性からの発話 46 例、女性からの発話 44 例が収められており（男性からの発話例が多いのは、一箇所のみ男性からの発話が 2 例続いているため）、一貫して男性が女性に愛を打ち明ける形で進んでいる。

3. 振り仮名の検討(1)

第 19 言語集の訳文には 99 箇所（101 例）の付訓例がある。これらは、その仮名の付された語が二字漢語か一字漢語か、振り仮名が句の形で付されているか字音か字訓かで、以下のように 6 つに分類（用例が存在するのは 5 種類）できる。

	句	字音	字訓	合計
二字漢語	3	13	63	79
一字漢語	0	2	20	22

ここではまず、もっとも特徴的な付訓例である、句の形で仮名が付されている例から見ていく（例文の後の番号は言語集の掲載順に私に付した）。

- ・只決^{ミイロサケツシテ}断^{ワシニツカスル}して以て處^{アラ}命^{カナフ}にすら非^{ソバニヤル}られは不能（11）
- ・人もし你が意に適^{カナフ}せは常に侍^{ソバニヤル}従^{ソバニヤル}せしむへきや（15）

用例（11）は、男性からの「（あなたに会いたければ）多くの危険を冒さなければなりません」という意味の文であり、「決断」に当たる単語はフランス語文やオランダ語文にはなく、「危険を冒す」が「處命」に当たる。「處命」は『大漢和辞典』や『漢語大詞典』にも収録されておらず、命をかけての意で「處命」という漢字を当て、それに「運に任する」という説明を付したものである。

これらの例は、訳文中の漢語の読みを付しているのではなく、漢語の意味を日常語で分かりやすく説明したものであり、オランダ語を漢字・漢語で翻訳した上で、振り仮名で日常語を記した例であると言える。

4. 振り仮名の検討(2)—— 二字漢語の音読例

二字漢語に字音読みが付された例は 13 例あり、当該漢語の一般的な字音が付された例が 4 例、異なる字音が付された例が 9 例となっている。

一般的な字音…威儀^{イキ}・慇懃^{インキン}・感動^{カンドウ}・骨髓^{ヨソズイ}
 異なる字音……報辭^{アイサツ}・令聞^{グハイブン}・注意^{シヤン}・領承^{セウチ}・忘忽^{ハワク}・悒悒^{リンキ}・禮節^{レイギ}（以上右訓）
 奸姦^{ケンキ}・應承^{セウチ}（以上左訓）

それぞれの漢語に一般的な字音が付されている例は特に問題はないため、ここでは、異なる字音の付された例を見ていく。

- ・其^{イシギ}慇懃^{アイヤツ}の報辭^{ヒョウジ}を承んか為に吾是を言に非ず (6)
- ・汝之間訊^{トムラフ} (トムラフ) 吾に於て令聞^{グハイブン}とす (2)
- ・其は宜し然れとも注意^{シヤン}して而是を辨せん (71)
- ・汝が説く所領承^{ヒョウサ}せざらんことは吾既に伝えり (79)
- ・汝は吾か癡者^{アホウ}の忘忽^{ハウハ}としたるか如きを見んと欲するか (50)
- ・是又頓^{ハヤク}に悋嫉^{リンキ}する哉 (41)
- ・汝は威儀^{イキ}にして且禮節^{レイキトノ}整えり (10)
- ・吾固^{モトヨリアンキコト} 奸姦^{カンギ} (カンギ) 是より甚きは有らじと思ふ (20)
- ・何を以て證^{セウコト} としたらは你應承^{セウチ} (セウチ) すべきや (72)

それぞれの漢語とそれらに付された字音に相当する漢語、それらが『書言字考節用集』や『雑字類編』に収録されているか否かを確認すると、下の表のようになる。なお、これらの辞書を取り上げた理由は、『書言字考節用集』は江戸時代の節用集の中でも収録項目が多く、幕末の知識人に広く用いられたと考えられているためであり、『雑字類編』は、『蘭語訳撰』や『蛮語箋』などの江戸時代のオランダ語の辞書・語彙集に大きな影響を与えていたためである。

訳文	仮名	『書言字考節用集』	『雑字類編』
報辭	挨拶	—— アイヤツ 挨拶 (巻9、言辭、22 オ 7)	
令聞	外聞	ヨキオツレ 令聞 (巻8、言辭、39 ウ 8) グハイブン 外聞 (巻8、言辭、65 オ 5)	
注意	思案	—— シヤン 思案 (巻9、言辭、45 ウ 1)	
領承	承知	レウシヨウ 領承 (巻8、言辭、46 ウ 8) シヨウチ 承知 (巻9、言辭、45 ウ 8)	
忘忽	茫茫	—— ハウ／＼ 茫茫 (巻8、言辭、12 オ 1)	
悋嫉	悋氣	—— リンキ 悋氣 (巻8、言辭、24 ウ 1)	
禮節	禮儀	禮節 (巻8、言辭、46 オ 6) ——	
應承	承知	—— シヨウチ 承知 (巻9、言辭、45 ウ 8)	ガテンスル 應承 (左訓：ノミコム) (巻②30 オ 6)
奸姦	姦宄	—— ——	

訳文で用いられている漢語は、『書言字考節用集』では「令聞」「領承」「禮節」の3語が収録されているのみであるのに対し、振り仮名の字音に相当する漢語は「禮儀」と「姦宄」を除き収録されており、振り仮名の字音語の方が、より日常的に用いられていた語であると考えられる。

いくつかの例について見てみる。

まず、例文(6)の「慇懃の報辭」はお世辞の意であり、「報辭」は『大漢和辞典』には収録されているものの、『漢語大辞典』や『日本国語大辞典第二版』にも収録されておらず、訳文の「報辭」だけでは理解が難しい漢語であると思われる。

例文(71)は、愛を受け入れるべきだという男性からの言葉に対し、「慎重に振る舞いたい」という趣旨で答えている例であり、「注意」は「よく考えて慎重に」という意味で用いられている。この「注意」の語は、『日本国語大辞典第二版』によると、1862年の『英和対訳袖珍辞書』で「Regardful」の訳語として「注意スル」と用いられたのが初出であり、本資料の例は訳語「注意」が用いられた最初の例である可能性もある。いずれにしろ「注意」では文意の理解は難しいと考え、「シアン(思案)」という振り仮名を付したのであろう。

例文(50)は、男性から女性に対し、「売り子のように(恋の悩みで)溜息をつけば良いのですか」というオランダ語文を翻訳した文であり、「忘忽」は『漢語大辞典』に「ぼんやりするさま。はっきりしないさま」とあるように、溜息をつくようにぼんやりするさまを指す語である。この語も『日本国語大辞典第二版』には収録されておらず、あまり用いられることのない漢語である。

例文(20)の「奸姦」は『漢語大辞典』にも『日本国語大辞典第二版』にも項目はない。右に付された「アシキコト」という語で漢語のおおよその意味は分かるものの、「カンキ」という字音を示すことで、より意味が限定されている(注12)。

なお、左側に字音が記されている例文(72)の「應承」は、訳文の日本語の二行目に当たるため、行間の関係で左に付されたものと考えられる。

これら訳文中に用いられた漢語は、他の文献にあまり用例の見られない語であり、振り仮名は、より日常的な語で訳文の内容を理解しやすくするために付されていると言えよう。その意味で、これらの例の振り仮名は、先に見た句の形で付された振り仮名と同様の機能を有していると言える。

5. 振り仮名の検討(3)—— 二字漢語の訓読例

本章では二字漢語に対し訓の付された例を検討していく。大きく分けて、二字で一語に読む熟字訓の例と、一字一字に和訓の付された例があるが、まず前者の51例について見ていく。

熟字訓の例は、その付された訓の品詞により、名詞、動詞、形容詞、形容動詞、

副詞に分けられるが、ここでは用例数の多い、名詞、動詞、形容詞の例について述べることにする。

【名詞】18 例

これらの例は、漢字に付された訓の部分で、その訳文が読み下せるか否かで、大きく二つに分けられる。

読み下せる……^{アンキョト}奸姦・^{アホウ}癡者・^{イロノヘ}萬種・^{クルシミ}困阨・^{シウチ}動作・^{タハムレ}戲言・^{トイ}問訊・^{ノチ}尔来・^{ハジライ}新情・^{ミキチ}操行・
^{ムスノ}孌子・^{メクミ}惠恩・^{ユエン}所為・^{サコナト}行誼・^{サキイ}感想（以上右訓）、^{コレケリ}結果・^{サシシ}啞兒（以上左訓）

読み下せない…^{メクラ}盲昧せり（右訓）

- ・吾思ふに^{クルシミ}困阨^{ヲコル}是を以て発起す（42）
- ・其れは^{タハムレ}戲言なりと吾も知れり（43）
- ・汝恋情に困て眼既に^{メクラ}盲昧せり（30）

例文（42）の「困阨」は、『書言字考節用集』にも「困阨（右訓：コンヤク）」（巻9、言辭、14ウ2）と「コンヤク」の形で収録されている。訳文本文においては漢語「コンヤク」として使用したものの、そのままでは意味が分かりにくいと考え、「クルシミ」と日常語の訓を付したものと考えられる。

『書言字考節用集』には、訳文本文に使われた漢語のうち、「困阨」の他にもう一例、「戲言（右訓：タハコト）」（巻8、言辭、44オ2）も収録されている。例文（43）の「戲言」は「冗談」の意味で用いられており、ばかげた言葉の意の「タハコト」より、ふざける意の「タハムレ」の方が、この文脈にふさわしい語であるといえよう。

一方、振り仮名に用いられた語については、『書言字考節用集』にも、「啞方（右訓：アハウ）〈俗語罵愚鈍者云爾〉阿房〈或用此字〉」（巻9、言辭、21ウ4）、「色々（右訓：イロノヘ）」（巻8、言辭、4ウ3）などが収録されており、やはり振り仮名に用いられた語の方が訳文本文の漢語より一般的な語であると言える。

漢語サ変動詞に名詞の形で訓が付されているため、そのまま読み下せない例が、「盲昧」の例である。「盲昧」の語は、『大漢和辞典』には「事理に暗くおろかなこと」とあり、『漢語大詞典』では明代の用例が記されているが、日本の古辞書や『日本国語大辞典第二版』には収録されていない。この文脈では、恋は盲目の意であるため、「メクラ」という訓を付したと考えられる。

左訓の「結果」「啞兒」の例は、訳文の右側にも余白があり、なぜ左に記されたかは不明である。

【動詞】20 例

動詞の形で訓が付されている例は、活用するため、そのまま読み下せるか否かが、先に見た名詞以上に問題になる。

読み下せる……^{ツカサ}委託する・^{マカ}寄委する／^{ゾサハ}備具れり
 読み下せない…^{ツケアウ}領證する・^{ツケガク}應允すへき・^{カハル}轉變せん・^{キロフ}忌嫌する・^{ヨナス}窘迫せしむ・^{シタウ}仰望
 する・^{ナメル}奸迫す・^{マヨハス}蠱惑せ・^{ヨコモ}発起す(終止形)、^{ウケガフ}應容せざる(未然形)、
^{タマサレ}欺誘せられんや・^{タマサレル}蠱誘せらるへし(未然形+助動詞)、^{ツケガフ}増超した
 る(連用形)(以上右訓)
^{スス}愛念す・^{オモフ}思念する(終止形)、^{オモヒ}思惟せ(命令形)／^{トムラフ}問訊(終止形)
 (以上左訓)

斜線より前の例は、いずれも訳文本文では漢語サ変動詞として用いられている例であり、「轉變」「発起」「愛念」「思惟」などは、『書言字考節用集』にも「テンベン」などの字音語の形で収録されている。

漢語サ変動詞に和語動詞の訓を付しているこれらの例は、以下の例のように、「應允」「應容」の漢語部分のみの振り仮名と考えずに、「應允す」「應容せ」に対して付されたものと解釈すれば、読み下すこともできる。特に、終止形以外の活用形で振り仮名が付された例については、その可能性が高いように感じる。

- ・吾が堪へ忍ふへからすして言ふ所を汝能く^{ツケガフ}應允すへきや (1)
- ・汝が^{ツケガフ}應容せざる心を吾^{ウヒ}奪^{ステ}ひ捨てたらんには (21)

しかしながら、漢語の下に「せ」や「する」などのサ変動詞の活用語尾が記されている点や、以下の「窘迫」「蠱惑」の例のように、訳文は未然形であっても振り仮名は終止形の例があることを考えると、やはり、訳文の漢語に対する読み方を示しているのではなく、個々の漢語の意味を日常語で注記した例だと理解すべきであろう。

- ・何々の事は思ふに你必ず吾を^{ヨナス}窘迫せしむ (29)
- ・然も吾人を^{マヨハス}蠱惑せしむることは為さじ (8)

また、漢語サ変動詞以外の例としては、「備具」と「問訊」の例がある。

- ・你今情事に心あらんには総て善事^{ゾサハ}備具れりとす (68)
- ・汝之^{トイ}問訊^{トムラフ} 吾に於て令^{グハイン}聞とす (2)

「問訊」は「訪問・訪れ」の意であり右には「トイ」の訓がある。この例の場合、「トムラフ」と動詞の終止形で読み下すことはできず、「問訊」には「訪う」の意味があることを注記していると考えるのが自然であろう。

なお、左訓のうち「愛念」「思惟」はすぐ右にオランダ語の単語が記されており余白がないために左に付されたものであるが、「思念」の場合は左に記されている理由は明らかではない。

また、これらの例の中には、異なる漢語に対し同じ訓の付された例が存する。上

に挙げた「ウケガウ」以外に、「ダマサレ (ル)」「マカ (ス)」の例がある。

- ・汝は必ず^{ウツサシ}蠱誘せらるへし (38)
- ・如何に手段を替て以て説くとも吾何そ^{カヅマシ}欺誘せられんや (73)
- ・不然而して吾又腹心を^{ツカ}委託すること能はず (51)
- ・汝に^{ツカ}寄委すること吾か父恐らくは許すへからず (89)

「蠱誘」と「欺誘」のうち、「蠱誘」は『雑字類編』に「蠱誘 (右訓: ダマス)」(③10 オ9)とあり、『漢語大詞典』にも収録されているのに対し、「欺誘」は『大漢和辞典』にも『漢語大詞典』にも見られない。しかしながら、「欺」「誘」にはともに「アザムク」という古訓があり(注13)、「欺誘」の文字列が「ダマス」という和語に対応することは理解できる。同じ「ダマス」でも、前者の例は、女性が男性に対し「(私のことを好きになるなんて)あなたはきっと欺されています(思い違いをしています)」という文脈であるのに対し、後者の例は、「色々言っても、私は絶対欺されません」という文脈である。前者は女性の魅力に欺されるという内容のため「蠱」字を用いていると考えられ、オランダ語文の細かいニュアンスの違いにより、訳文の漢字・漢語を使い分けている例である。

「委託」と「寄委」のうち、『大漢和辞典』には「委託」のみ収録されているが、『漢語大詞典』には両語ともに「委託」の意味が記されている。例文(51)は、女性から男性に対し「あなたに心を任せ自由を手放して恋愛を始めることはできない」という意味の文を「腹心を委託する」と訳している。一方、例文(89)は、男性が女性に対し迎えに行くと申し出たのに対し、女性が「私がいいと言っても(迎えを任せると言っても)父はそれを認めないでしょう」と答える文であり、同じ「マカス」であっても、後者の方が具体的な内容を指している。

これらの例からも、訳文の漢語は、可能な限りオランダ語の意味を厳密に訳すことを意図し、それぞれの文脈にふさわしい漢字・漢語を当てようとしているのに対し、それに付された和語は、漢字・漢語の意味を日常語でより分かりやすく示していると言える。

【形容詞】8例

読み下せる……^{カウツ}固執して・^{カウツ}眩昧する (以上右訓)、^{イチツヨク}固執する (左訓)
読み下せない……^{イハランキ}艶嬌の・^{ウツラシ}美貌に・^{フクロカ}快朗たらん・^{ニハロキ}快爽なる・^{ヤスシク}艶優に

形容詞の8例についても、訓の活用形により、振り仮名部分で読み下せるものと読み下せないものがある。また、動詞の場合とは異なり、終止形以外の語形で記された語が多い。

「固執」には「イヂツヨク」「カタク」の二種類の訓が付されており、「快爽」「快朗」にはともに「ココロヨ (シ)」の訓が付されている。

(10)

- ・汝^{キミ}縦^{イヘ}ひ固^{ツク}執^{ノゾク}するも後^カ終^{ハル}に轉^マ變^カせんこと吾^ガ是^ハを知^シれり (25)
- ・汝^{キミ}も斯^カく固^{ツク}執^{ノゾク}して肯^{アヘ}て不^フ承^ケは實^{マコト}に無^ム情^{ジョウ}の至^タりなり (74)
- ・汝^{キミ}が應^{オウ}答^ダせざる心^{ココロ}を吾^ガ奪^ハひ捨^スてたらんにはいかに快^{クハ}爽^{スウ}なるへき (21)
- ・吾^ガ只^タ汝^{キミ}が新^{シン}情^{ジョウ}を見たらんには作^サ麼^マか心^{ココロ}に快^{クハ}朗^{ロウ}たらん何^{ナニ}々… (44)

「固執」の例は、両例とも男性が女性に対し、頑なにならずに自分の好意を受け入れるように促す文での用例であり、「イヂゾヨシ」も「カタシ」も文脈にふさわしい語ではあるが、「イヂゾヨシ」の方が、女性の強情なさまを端的に表現している。

「快爽」「快朗」の2語は『大漢和辞典』に収録されておらず、「快朗」は『漢語大詞典』にも収録はない。『日本国語大辞典第二版』では、両語とも幕末・明治以降の例が見られるのみであり、本資料での例が日本における初出例の可能性もある。

一方、二字漢語に対し、一字ごとに訓を付した例は12例存する。

これらの例を、これまでと同様に、振り仮名部分で読み下せるか否かという観点から分けると以下ようになる。

読み下せる……不^フ承^ケは・不^フ拘^コして・不^フ好^{コウ}・不^フ堪^{カン}る・不^フ成^{セイ}らまじ・不^フ解^{カイ}・如^ニ斯^シ・
彼^{カレ}是^{コレ}・何^{ナニ}等^{トウ}・好^{ヨキ}事^{コト}・好^{ヨク}悪^{アク}
読み下せない…思^{オモ}慕^{ホシ}する

これらの例には、いずれもそれぞれの漢字の一般的な訓が付されている。活用する語の場合は「思慕する」の一例を除き読み下せる語形になっており、これらは語の意味を日常語で説明しているというより、その語の読み方を示したものだと考えられる。

6. 振り仮名の検討(4)—— 一字漢語の例

本章では一字漢語に対する振り仮名の例を取り上げる。

一字漢語に振り仮名を付した例は全22例であり、それらのうち訓読例が20例あり、そのうち19例まで読み下すことができる。

【動詞】9例

読み下せる……移^{ウツ}さん・適^{オナ}はざる・適^{オナ}はん・整^{トノ}えり・勝^{マサ}る・奪^{ウハヒ}ひ・捨^{ステ}て・非^{アラ}ら
されは
読み下せない…適^{オナ}せは

【形容詞】1例

無^{ナカ}らん

【名詞】2例

意^{コト}・譚^{ハナシ}

【副詞】8例

肯^{アヘ}て・速^{スミヤカ}に・縦^{タト}ひ・将^{マサ}に・固^{モトヨリ}・纔^{ワジカ}に・頓^{ハヤク}に・聊^{イサハカ}か

動詞の9例は、いずれも当該の漢字の一般的な訓が付されたものである。読み下せない1例は、「你在意に適せは(あなたに気に入られたら)」(15)の「適す」に「カナフ」と付訓した例である。「意に適ふ」という例は、この言語集に3例存するが、当該例は2番目の例であり、初出例に「適」の意味を明示したという例ではない。

副詞の例では、「頓に(とみに)」に対し「ハヤク」と和訓が付された例を除き、当該の漢字に一般的な訓が付されている。「頓」は「頓に怏嫉する哉(もう嫉妬するのか)」(41)という例であり、「頓」の訓として「ハヤク」は一般的ではないが、時間の短さをいう点では「ハヤク」の方が分かりやすいと考え、仮名が付されたのかもしれない。

一方、一字漢語に字音の付された例は、「徹す」「證す」の2例のみであり、後者の例は、訳文では「證す」という動詞であるのに、振り仮名では「証拠」という字音語を付している。

- ・吾你を愛念する事骨髄に徹す^{ニツズメ}_{テツ} (70)
- ・無比の切情を何を以て證^{セウコト}したらは你應承(セウチ)すべきや (72)

これら一字漢語に付された例は、そのほとんどの例が振り仮名部分で読み下すことができ、基本的には、それぞれの漢字に対する読み方を示したものであると理解できる。

おわりに

『和仏蘭対訳語林』第4冊・第19言語集を取り上げ、訳文の漢字・漢語に付された振り仮名の考察から、本資料の翻訳のあり方について見てきた。本稿で述べてきたことをまとめると、以下ようになる。

1. 当該言語集に付された振り仮名は、その対象が一字漢語か二字漢語か、仮名が句の形か字音か字訓かにより、大きく6種類(実際に用例があるのは5種類)に分類できる。
2. 当該言語集の振り仮名には、訳文の漢字・漢語の意味を日常語で注記するという性格の強いものと、漢字・漢語の読みを示したものとがある。
3. 振り仮名例のうち、訳文の漢語の意味注記という性格の強いものは、句の形での付訓例、異なる字音読例、熟字訓の例などであり、全用例の約3分の2を占めている。
4. 振り仮名例のうち、当該漢字・漢語の一般的な読みを示した例は、一字漢語や二字漢語を一字ずつ訓読した例に多く、用例全体の約3分の1を占めている。

本資料においては、異なる字音が付された振り仮名例などに端的に見られるように、オランダ語の例文を、まずは唐話語を含む漢字・漢語を用いて翻訳し、それら

に対応する日常語を仮名の形で付すことによって意味をより明確にするという翻訳の過程が存在した。

長崎通詞の編纂した辞書や語彙集に唐話語の影響のあることは、すでに多くの先行研究により論じられてきたことであるが、通詞たちが実際に翻訳活動を行う際にも、彼らの持つ当時の中国語についての知識が有効に使われていた。そして、それらの翻訳文に付された振り仮名には、日常語形を示すことにより文意の理解を助けるという機能もあつたのである。

今後は、他の言語集や長崎通詞の翻訳に係る他の資料を対象に、彼らの翻訳活動の基盤となった中国語に対する知識がいかなるものであつたのか、また、それらの訳文に付された仮名がどのような機能を有していたのかを考察したいと考えている。

【注】

- 1、本資料は、日本最初の仏語辞書や語学書と称されることが多いが、原典である Pieter Marin の『Nouvelle Methode』はオランダ語で書かれたフランス語の入門書であり、日本最初のフランス語学習書というべきものである。
- 2、『Nouvelle Methode』の前半部分の翻訳である『払郎察辞範』には、題言や内題に「払郎察辞範」という書名が書かれているのに対し、『和仏蘭対訳語林』は表紙の題簽に「和仏蘭対訳語林」と墨書されているのみである。そのため『和仏蘭対訳語林』は本来の書名ではない可能性があり、『和仏蘭対訳語林』までを含めて『払郎察辞範』と呼ばれるべきではないかと松村明氏は指摘している（同氏『『払郎察辞範』と『和仏蘭対訳語林』、『国語研究室』創刊号、1963、東京大学国語研究室）。
- 3、『払郎察辞範』の第1分冊本文巻頭には、次のように、原典が1775年版の『Nouvelle Methode』であることが明記されている。

新正拂郎察語例

曆数一千七百七十五年鑲版

西洋	大儒官	批得耳	麻林著
和蘭	加比旦	頭地力竭讀	和梓口授
大日本	和蘭家譯	長崎	本木 正榮等奉
命			謹譯

一方の『和仏蘭対訳語林』には原典の明記はないが、吉岡秋義氏の調査により、単語の綴りや短文の構成が『Nouvelle Methode』の1790年版と一致する箇所があり、同書の編纂が1775年版と1790年版の両版を用いて行われたことが指摘されている（同氏『『払郎察辞範』と『和仏蘭対訳語林』に就いて』、『長崎大学教養部紀要 人文科学』5、1965、のち園田尚弘・若木太一編『辞書遊歩——長崎で辞書を読む——』、2004、九州大学出版会、所収）。なお、『Nouvelle Methode』の1775年版は現在国内ではその存在が確認されていないため、本稿では『Nouvelle

『Methode』を参照する際は、1790 年版の国会図書館本を用いている。

- 4、まずフランス語を横書きで墨書し、その左にやや小さい字でオランダ語を横書きで朱書し、その左にフランス語とほぼ同じ大きさで、日本語を縦書きで墨書している。
- 5、ここにはフランス語が記されていないが、同じく『Nouvelle Methode』1790 年版にもフランス語のタイトルは存在しない。
- 6、原典の『Nouvelle Methode』は、ページの中央に仕切り線があり、左にフランス語の単語や文章を記し、右にそれに対応するオランダ語の単語・文章を記している。
 なお『和仏蘭対訳語林』は訂正の跡や付箋の類も多くあり、草稿の段階であったことは明らかである。オランダ語は朱でフランス語と日本語の間に記されているが、清書の際にはオランダ語は消されることになったと思われる。長崎通詞の手による日本最初の英和辞書である『譜厄利亜語林大成』の場合、実際に、草稿本では朱で書かれていた蘭単語が、抜稿本（定稿本）では削られている。
- 7、渡辺実氏「幕府の英仏独語研究の展開」（『人文』10、1964、京都大学教養部）、杉本つとむ氏『江戸時代蘭語学の成立と展開Ⅲ』（1978、早稲田大学出版部）など。
- 8、「起寤」は収録されておらず、「攪合」は高櫻（1929-）の例が挙げられている。また、「佳好」は『論衡』に用例があるが、『日本国語大辞典第二版』には「すぐれてよいこと」として『開物新書』（1869）の例が挙げられているのみであり、明治以前にはあまり使用される語ではなかったと思われる。
- 9、全体を漢文体で翻訳する方法もあるが、『和仏蘭対訳語林』の訳文は原則的に漢字仮名交じり文であり、語彙に唐話語が多く見られるというレベルである。なお、『和仏蘭対訳語林』の前半部分である『弘郎察辞範』では「彼者住于吾之家」「汝亦将来於彼處乎」（卷 2・形容詞及所在詞を論ず）の例のように、本文は漢文体で記し、振り仮名の形で日本語を記しており、語彙には同じく唐話語が多用されている。
- 10、副題があるのは、第 19 言語集の他には第 22 言語集の「諸儀令式言語集」のみである。
- 11、この対等な男女の恋愛という会話のテーマには杉本つとむ氏も注目され、注 7 著書において、この第 19 言語集の男女の対話と明治初期の政治小説における男女の会話の相似性を指摘されている。この第 19 言語集に関しては、拙稿「長崎通詞の翻訳活動——『和仏蘭対訳語林』第 4 冊・第 19 言語集を対象として——」（『国語と教育』30、2007、長崎大学教育学部）において、その概要と翻訳上の問題点について論じている。
- 12、「姦宄」は『日本国語大辞典第二版』には「心がわるく、よこしまであること、また、そのさまや、そのような人」とあり、悪いこと全般を指す語ではなく、人の性情を指す語である。
- 13、ともに『観智院本類聚名義抄』に「アザムク」の訓がある。「ダマス」の語は日葡辞書から記載があるが、「欺」「誘」字に「ダマス」の訓を収める古字書は見られない。

(14)

【検索文献】

- ・杉本つとむ監修、藁科勝之著『雑字類編 影印・研究・索引』（昭和 56 年、ひたく書房）
- ・中田祝夫・小林祥次郎著『改訂新版 書言字考節用集 研究並びに索引』（平成 18 年、勉誠出版）
- ・『漢語大詞典 3.0 版』CD-ROM（2007 年、商務印書館（香港）有限公司）

[いけだ ゆきえ・長崎大学・1993 年卒業]